

竹取物語・伊勢物語

三谷 榮一
大津 有一
編

角川書店



日本古典鑑賞講座

第五卷

竹取物語・伊勢物語

昭和三十三年五月十日 初版發行
昭和四十年七月三十日 六版發行

定價五一〇圓

編者 三谷榮一

發行者 角川源義

印刷者 中内あき子

發行所 株式會社 角川書店

東京都千代田區富士見町二ノ七
振替東京一九五二〇八
電話東京(265)七二一(大代表)

落丁・亂丁本はおとりかえいたします

竹取物語・伊勢物語

三 谷 榮 一
大 津 有 一
編

解説

竹取物語

カタリゴトから文學への形成 古代の民族や氏族の信仰によつてささえられていた地方地方、家々のカタリゴトは、氏族社會の崩壊と運命をともしにして、生活と血肉的な關係を失い、信仰を離れた興味ある話柄わづらひとなつて、長い間、傳承されていた。しかし中には、早く「古事記」「日本書紀」や、「風土記」などに編みこまれて神話・傳説や説話の類となつているものも少なくないが、多くは口頭の詞章にのぼせつつ、貴族や地方に、あるいは巡遊伶人によつて語り傳えられていた。そして語られる説話として、新しいそれぞれの生活感情によつて潤色されながらも成長し、展開して生きつづけていたのである。

しかるに奈良から平安の時代にかけての頻繁な唐との交通は、わが國文化に大きな影響をもたらし、かの地の讀み物が續々と渡來して、貴族や有識者の間にはげしい勢いで愛讀され出した。當時の讀み物には、「日本國見在書目錄」によつてもわかるように、「穆天子傳」「漢武帝故事」「漢武內傳」「神仙傳」「搜神記」「旋異記」「冥報記」「列女傳」「列女傳類」「靈異記」「列仙傳」「山海經」「神異經」「十洲記」「遊仙窟」など、多く神仙系の傳奇類が傳えられていた。そしてその篇名も「記」と「傳」と名づけたものが最も多い。「傳」と「記」とが近い關係にあるのも、元稹の「鶯鶯傳」が一名「會真記」と呼ばれていたことによつてもわかる。こうした「傳」と「記」が中心となつた作品が續々渡來したので、奈良末期から平安初期にかけて、わが國の口頭にのぼせて傳えていた説話も、この傳奇類

隆盛な唐文學の影響を受けて、漢文體の「傳」とか「記」とかになつて、文藝化される機運にさえなつた。

傳奇譚と滑稽譚と 今日現存したり、存在したことのかつてゐるものに、「傳」と名づけられた「柘枝傳」「浦島子傳」、紀長谷雄の「白箸翁傳」、「記」と名づけられた「睡覺記」「續浦島子傳記」などがあるのはそれである。「柘枝傳」は、現存しないのでよくわからないが、吉野川のはとりに美稻という漁夫があつて、梁をかけて魚を取つていた時、柘枝が流れかかり、それを取つて歸つたところ、それが女子に化して同棲したが、後には羽衣を着て飛んで行つたという。「萬葉集」には柘の枝の仙媛とし、「懷風藻」にも仙女として取り扱つてゐるが、ちようど「浦島子傳」にしても、浦島の物語を仙人ものにしてゐるのと同じく、ともに民間説話を素材として、中國文學の影響のもとに神仙系の傳奇譚として漢文化されたものと考えられる。「白箸翁傳」というのも、貞觀のころ、紀長谷雄の作とあるから平安初期の短い傳奇的な漢文體の小説であつたらしい。「睡覺記」も現存してないのでよくわからないが、その題名からいつても、睡氣さましになるような漢文體の滑稽小説であつたらしく、弘法大師がその著「聾聵指歸」の中で中國の「遊仙窟」と並べて批評してゐるほどで、「睡覺記」の當時の世評の一端を知ることができる。すなわち當時の漢文體の小説ふうの讀み物として、世上の話題となつたものの中には、神仙譚ふうな傳奇ものと、滑稽譚とがあつたことがわかり、しかもこの二つの性格は、「竹取物語」へも尾を引いてゐる要素でもあつたことがいえたのである。

「語」という文學 こうした動きに乗つて、いままで語り伝えられた説話を踏まえ、漢文化された小説などの影響を受けて成立したのが、「竹取物語」のも、本となつた漢字體のものではなかつたかと思われる。しかし、中國ふうの「記」とか「傳」とかのような漢文體に創作したのではなく、漢學謳歌に對してやや批評的で、むしろ口頭の傳承に當時の世態風俗を取り入れたものを「記紀」「風土記」「日本靈異記」などに近い文體で、變體漢文體を用いて書かれ

ていたのではなかつたらうかと思つてゐる。そういつた一つの説話の單位を日本ふうには「語」といつていたのではないかと考へてゐる。「日本書紀」に「記在弘計天皇紀」(清寧紀)、「語在穴穗天皇紀」(雄略紀)、「語在別卷」(雄略紀)などとある。この「語」は、カタリかカタリゴトと訓む一つの説話の單位をさすことはいふまでもない。「今昔物語集」の各説話の表題に、たとえば「竹取翁於^{たけぢやうのなか}三^ミ室^{ムロ}中^{ナカ}一^{ヒト}見^ミ付^{ツケ}女^メ兒^コ養^フ語」といふふうに、各説話がそれぞれ「何何語」という名稱のもとに一單位の説話として呼ばれてゐる。おそらくこの「語」という説話の單位の名稱は長い傳統につらなつた名稱であつて、變體漢文體化された竹取翁譚も「竹取翁語」といつたような名稱で傳わつてゐたのではなからうか。

「竹取物語」の出現 貴族社會の確立とともに、貴族の繁榮をはかるために子弟の教育に力を入れ、争つて私學を建てて子弟を教習し、大學に送り、いい官途につけるように努めた。ところが今日のような男女共學などは求むべくもなかつた。女性の教育はほとんど顧みられないのが當時の實情で、その中ではわずかに高級貴族の子女が、多少の教育を受ける程度のものであつた。それも作歌とか物語をもつてするのが唯一の教育法であつた。物語が唯一の教育法となつたのは、もともとカタリゴトが、地方地方や家々の、民族とかある氏族に對する教育的機能をはたしてゐた。その傳統によるからであつて、すでに古い説話が信仰の目的というよりは、子女たちに傳統的な思考とか美しい感情を養うに役立つと高く評價されてゐたからである。したがつてそれにふさわしいように時代的志向も取り入れて創作されてもゐた。「竹取物語」の求婚譚などの挿入も、おそらくかかる部分であつたのではなからうか。

當時は漢文體・變體漢文體で書かれた臺本を子女が直接讀むというより、カタリゴトの傳統に添うて、語つてきかせることが主として行われてゐた。ところが、平安時代もごく初期の時代をすぎて、簡便な假名の使用が弘まるにつれ、漢文體などで書かれたものが盛んに訓み解かれ、假名文學となつたらしい。「萬葉集」が訓みとかれる機運にな

つたのも一つにはこうした時流によるのであつたらしい。ここに變體漢文體で書かれていた「竹取翁語」も訓みとかれた。これが「竹取翁の物語」であつた。「語」が訓みとかれてモノガタリと訓まれたのである。「物語のいで來はじめの祖」なる名譽を荷う結果となつたのも、こうした理由によるものではないかと思う。

成立年代と作者　したがつて「竹取物語」の成立はいまのところ、いついつという風にはつきりしていない。しかし、大體私は貞觀八年（八六六）以降、延喜十年（九一〇）以前と考えている（拙著「竹取物語評解」解説。また、もと本の變體漢文體のができたとしても、それがいつ訓みとかれたのかはつきりしない。最初に訓みとかれたのは、「古今集」の時代から「後撰集」の時代までの間でなかつたかと思つてゐる。しかし一度訓みとかれたにしても、轉寫していくうち、幾度となく加筆された様子が現存の諸本を通じてうかがわれる。作者もまつたく手がかりがない。男性であることはたしかである。壬申の亂の近江方なり、その同情者の子孫かであつて、天智天皇系である桓武天皇以降の天皇の御出現を喜びつつも、藤原氏の擡頭には心よく思わず、大伴、安倍、石上といった壬申の亂の功臣にも好意をもたない。したがつてこの諸氏とつながりのない氏族の出であること。漢學と佛教によく通じていたが、その思想はむしろ漢學謳歌に對する古傳尊重ともいうような多少傳統派の方で、和歌の技巧にも練達し、一般庶民の中にあつた説話など採録しやすい、貴族と庶民との媒介者の地位にあつたことなどを參看すると、身分や地位がそれほど高くない、おそらく大和に住む僧侶階級か學者たちの筆になるものではないかと臆測してゐる。

傳　本　傳本はもつとも古い物語でありながら、不思議なことに古いところが少しも存在しない。さらに江戸期以前の古寫本さえまれであつて、わずかに天正二十年（一五九二）書寫の武藤元信氏舊藏本が現存本として最も古い。これは通行本の代表といえる。本書の本文もこれによつた。これに對して、「古本」と稱せられる系統があり、新井本

がその代表であるが、はたしてこれらが古本であるかどうかははつきりしない。今後の研究に俟たなければなるまい（「解題と鑑賞」昭和三十三年二月）。註釋書では古い時代のはまつたくなり、その中で本居宣長の門人、田中大秀の著になる（「竹取翁物語の諸本」中田剛直）。

「竹取翁物語解」がもつともすぐれている（「解題と鑑賞」昭和三十三年二月）。

月「竹取物語研究文獻目錄」。

伊勢物語

歌ガタリ さて、一方、カタリゴトの中に、單に敘事的に語られるものと、歌を中心に語られるものとがあつた。しかし歌は元來自分の心を述べて相手の心をひこうとする抒情的な性格をもっているものであるから、歌を中心に語られるもの——歌ガタリ——は、ある一個人にまつわるものが主であつた。したがつて「記紀」や「風土記」を見ても、歌を詠んだ人とか製作事情が一應語られる。しかしこれらの場合、これが歌本來の姿を示したものととは到底考えられないことが多い。これらの歌は、もとそれぞれ獨立していたものであつたが、敘事的なカタリゴトが語られているうちに、ある主人公にふさわしい説話の中に取り入れられ、ときには詞章に多少の改作までほどこして挿入されて、現在のような、歌を中心とした説話の形となつたと考えられるのが少なくない。ことに「古事記」が三卷という分量でありながら、それに収める歌謡約一一〇首で、「日本書紀」三十卷の總歌數約一三〇首にも、ほぼ匹敵するほどの歌數を收録している事實は、「日本書紀」より「古事記」の方が、歌ガタリ的であり、また個人にまつわる短篇が多く挿入されていることを意味し、また口頭の傳承そのものを採録したともいえたのである。そして「古事記」の歌ガタリの部分は、戦闘・酒宴・相聞・挽歌にもわたるが、その中で最も多いのは相聞に關するもので、しかもたいい戀歌である。これは「古事記」に限らず、記紀歌謡の大半はこの種の歌ガタリといつてよい。しかもこれが歌ガタリ、そしてこの系統に出現した「歌物語」の性格を考える上に注意してよいことである。歌ガタリは、後にも「すき

ずきしき(色メイ
テイル)「歌語り」(「源氏物語」賢木巻)といわれるように、もともと男女間の贈答を中心としたものである。平安貴族の間には、案外こういつた戀歌を中心とした歌ガタリが語られ、口頭での文藝の世界が、われわれの想像以上に發達していたものらしい。そういつた歌ガタリがいくつか傳わつていたところに、「伊勢物語」が成立したともいえる。

「伊勢物語」の成立 「伊勢物語」は時に「在五中將の日記」(「狹衣」)・「在五が物語」(「源氏」)とか「在中將」(「更級」)といわれるほど、在原の業平の一生を中心に描いた物語として讀まれて來たことは、争えない事實である。短歌を中心とした短篇歌語り一二五段、和歌二〇九首から成つてゐる(段數は傳本によつて異同がある)。各段はおおむね「昔ありけり」の句をもつて始められ、歌ガタリの面影を残している。各段には少なくとも一首以上の歌が介在し、その歌は業平の歌を中心とし——おそらく當時存在した業平集を基本としたものであらう——ているが、案外に「萬葉集」以來の民謡的な口頭の傳承歌や「古今集」の「よみ人しらず」の歌——これもほとんど民謡とか歌ガタリ類の歌といえるものであるが——その類歌とか改作とかであつて、いわば歌ガタリ化されていたか、歌ガタリ化されるのを待つていた口頭の傳承歌といつてよい。かくて「伊勢物語」の歌の多くは、業平を主人公とするに都合のよいように解釋され、詞書が創作され、脚色されて一段一段が歌ガタリを形成し、一つの物語として編成されたのである。その一段一段はたいいてい男女間の情事を敘している。したがつて、藤原專權確立して社交華やかにならうとするころのこととて、贈答歌としての型を、貴族の子弟はどうしても覚えなければならなかつた。紳士・淑女となるための教養として覚えなければならぬ戀愛歌や贈答歌があつた。その模範歌集として、まず「伊勢物語」は支持を受けた。そしてそれは長く長く三代集とともに歌道の必讀書と考えられるに至つたのである。

「伊勢物語」という名稱 こういつた成立をもつと考えられるだけに「伊勢物語」については、不明の事柄が少なくない。第一、その名稱の「伊勢」とは、どうして附けられたか諸説があつてはつきりしない。多くは牽強附會の妄説であつて、とるに足りないけれども、ただその中から考えられるのは、もともと「在五が物語」式に稱えられていたのに、たまたまある傳本が書寫の關係からか、伊勢齋宮の歌ガタリが卷頭にあるのがあつて、「伊勢物語」と稱せられるようになってしまつた。それからこの一名がこの物語の代表名となつたと考えられるのである。だから「伊勢物語」という名に統一されたのは、平安時代も、ずつと末期になつてのことではなからうかと思われる。

作者と成立年代・傳本 作者も成立も諸説はあるが、まづたく不明。おそらくもあつた業平の歌集を中心にして、「古今集」との間に深いつながりをもちつつその前後かに成立したものと考えられている。しかし人氣のあつた物語だけに幾度か加除が行われた形跡が強く、語句、段數、配列、歌數を異にする傳本も少なくなく、異本がきわめて多い。傳本の中心をなすのは、中世以降流布の本となつた藤原定家書寫の系統で、これとても天福本・武田本・流布本とあつて、語句に小異を見るほどであり、その他にも定家本以外の古本系統、眞名本、朱雀院塗籠本、異本の集成本とも目される大島本などがある。註釋書はきわめて多く、大津有一氏の「伊勢物語古註釋の研究」という大著があるほどであり、私の「伊勢物語の註釋書」(「解題と鑑賞」昭和三十一年十一月「伊勢物語の研究と展望」)も参考となるであろう。

目 次

解 説

三 谷 榮 一

三

竹取物語

カタリゴトから文學への形成 (三) 傳奇譚と滑稽譚と (四)
「語」という文學 (四) 「竹取物語」の出現 (五) 成立年
代と作者 (五) 傳本 (六)

伊勢物語

歌ガタリ (七) 「伊勢物語」の成立 (八) 「伊勢物語」とい
う名稱 (八) 作者と成立年代・傳本 (九)

竹取翁の物語

三 谷 榮 一

一 九

竹取の翁 (一) 箕のもつ威力 (二) 神人としての竹取
(三) 箕作り長者 (三) 竹取塚 (三) 箕を作るを業と
なす (四) 座頭と巫女 (四) かぐや姫の靈格の推移 (五)
口頭傳承を採集した「古今集注」 (六) 神性の墮落 (七)
元の木阿彌 (七) 現代の竹取説話 (七) 羽衣説話が基本
(八) 上代説話の型 (三) 炭焼長者譚 (三)

竹取物語

三 谷 榮 一

三

かぐや姫のおひたち

三 谷 榮 一

三

今は昔 (三) かぐや姫の意義 (四) 「さぬき」と「さる
き」 (五)

つまどひ

三 谷 榮 一

三

世界の男 (四) よばいの語源 (四) 實在の五人 (四)
翁のくどき (五) 變化のもの (五) 會話の性格 (五)
戀人をよぶ笛 (五) 雅樂と唱歌の流行 (五) 「竹取」の文
體 (五) 示された難題 (五)

佛の御石の鉢

三 谷 榮 一

三

列傳體の物語 (六) 敬語のつかない皇子 (五) 各主人公
と敬語の比率 (六) 後段ほど手がはいったか (七) 小倉
山 (六)

蓬萊の玉の枝

三 谷 榮 一

三

意表に出た作者 (七) すり替えられた玉の枝と優曇華 (七)
窮地に追い込まれた姫 (五) 漢文句調の文體 (七) 人の
いい竹取の翁 (六) 合理主義の作者 (七)

火鼠の裘

三 谷 榮 一

三

財豊かな人と作者 (九) せり上げる舶來物 (九)
歌問答 (九) 懸詞と縁語 (一〇) 巧みな作者 (一〇) 求婚の

三

龍の首の珠

ワンマン武將とその家來 (一〇六) 遭難譚の成長 (一一二) 未練のない美 (一二五)

燕の子安貝

對蹠的な五人たち (一二五) 富をもたらす燕 (一三二) ぐしの穴 (一三三) 末子成功型 (一三七)

天の羽ごろも

物思う頃 (一三三) 月見を忌む (一三三) 八月十五夜と昇天 (一三三) はかない抵抗 (一四〇) 具象的表現 (一四七) 天人來迎 (一四七) 魂よばい (一四九) 後人の筆 (一五〇) 七番目のおち (一五〇) 富士という文字 (一五五) 何を燃した煙か (一五五) 近古小説と不死藥 (一五五)

業平物語

大津有一

序

色好み (一六) 業平傳 (一六) 朱雀院本の構成 (一六) 業平をめぐる女たち (一六四)

一 戀愛の種々相

初戀 (一六) 二條后との戀 (一六) 東下り (一六) 紀有常の女 (一六) たけくらべ (一六) 三角關係 (一七) はかない戀 (一七) 戀の手練手管 (一七) あさはかな戀 (一七) 老いらくの戀 (一七) 齋宮との戀 (一六)

一〇三

二 右馬頭の話

藤原常行 (一六) 貞數親王 (一六) 惟喬親王 (一六) 母と子 (一六) 紀有常 (一六) 在原行平 (一六) 藤原基經 (一七) 藤原敏行 (一七) 終焉 (一七)

伊勢物語

大津有一

初冠 (第一段)

初戀 (一七)

西の京の女 (第二段)

まめ男 (一七)

ひじき藻 (第三段)

物名 (一七)

西の對 (第四段)

多情佛心 (一八) 崔護の戀 (一八)

築地の崩れ (第五段)

歌の徳 (一八)

芥川 (第六段)

鬼が女を一口に食った話 (一八)

東下り (第九段)

一六

三六

一六

一六

一六

一六

一六

一六

一七

一六

一七

一七

一七

八橋 (二八)	宇津の山 (二九)	富士山 (二九)	隅田川 (二九)	よろめき女性 (三〇)	
たのむの雁 (第十段)				源 至 (第三十九段)	二六
三芳野の里 (一九四)				螢火 (二〇)	
武藏野 (第十二段)				あかぬ別れ (第四十段)	二八
戀の道行 (一九五)				戀に上下の隔てあり (三〇)	
栗原の姉齒の松 (第十四段)				上のきぬ (第四十一段)	三二
狐か水槽か (一九七)				緑衫の袍 (三一)	
紀の有常 (第十六段)				行く螢 (第四十五段)	三三
斜陽族 (二〇一)				戀わずらい (三三)	
天雲のよそ (第十九段)				うるはしき友 (第四十六段)	三四
職場結婚 (二〇三)				男の友情 (三五)	
おのが世々 (第二十一段)				花 橋 (第六十段)	三五
性格の相違 (二〇六)				女心 (三六)	
筒井筒 (第二十三段)				こけるから (第六十二段)	三七
たけくらべ (二〇八)	妻の記 (二一〇)	東窓をふさぐ (二二三)		幸福はどこに (三八)	
三年 (第二十四段)				つくも髪 (第六十三段)	三九
悲戀 (二二四)				老いらくの戀 (三九)	
下 紐 (第三十七段)				在原なりける男 (第六十五段)	三三

戀は盲目 (二三四) 夜曲 (二三)

狩の使 (第六十九段)

齊宮の戀 (三三) 連歌 (四一)

安祥寺 (第七十七段)

悲歌 (四三)

山科の禪師の親王 (第七十八段)

山科の宮 (四四)

貞數親王 (第七十九段)

千尋の影 (四七)

河原院 (第八十一段)

源融 (四六)

洛の院の櫻 (第八十二段)

櫻狩 (三五) 十一日の月 (五三)

小野の雪 (第八十三段)

主従の情誼 (三五) 夢かとぞ思ふ (五五)

さらぬ別れ (第八十四段)

母と子 (三五)

身をし分けねば (第八十五段)

やらすの雪 (三六)

布引の瀧 (第八十七段)

龍の描寫 (三六) 浮き海松 (三六)

及ばぬ戀 (第九十三段)

戀の常識 (三六)

天の逆手 (第九十六段)

呪詛 (三六)

立田川 (第百六段)

千早ふる (三七)

藤原の敏行 (第百七段)

戀文の代作 (三七) 身を知る雨 (三四)

筑摩の祭 (第百二十段)

カマトト (三七)

深草の女 (第百二十三段)

女の純情 (三七)

終焉 (第百二十五段)

死の足音 (三七)

二三七

二四三

二四四

二四六

二四八

二四九

二五〇

二五七

二五九

二六一

二六六

二六七

二六九

二七一

二七四

二七六

二七七

竹取
伊勢 物語の窓

物語の様式

森岡 常夫 三六

物語の意義とその様式 (二六)
作り物語 (二六) その歴史 (二七)
歌物語 (二八) 日記・家集への接近 (二八) 歴史物語 (二九) 説話集 (二九)

竹取物語と幻想

中村 眞一郎 二九

「竹取物語」はおもしろいか (二九) 寫實主義 (二九) 幻想小説 (二九) 幻想の意味 (二九) 日本的幻想 (二九) 現實と超現實 (二九)

諺物語と歌物語

三谷 榮一 二九

「竹取物語」のおち (二九) 地得ぬ玉造り (二九) 雉子の頓使 (二九) 神うれづく (二九) 説話の閉じと諺 (二九) 經文で閉じる (二九) 民間の諺物語 (二九) 諺の意義と效用 (二九) 諺の發生 (二九) 風俗諺と地名説話 (二九) 女性に敬遠される諺 (二九) 「とめてとまらぬ戀の道」の物語としての「伊勢物語」 (二九) 歌物語としての「伊勢物語」 (二九) 神歌 (二九) 歌占 (二九) 巫女と男祝・審神者 (二九)

竹取物語の庶民性

長谷 章久 三三

王朝文學の貴族性 (三三) 對庶民意識の變化 (三三) 唐風

業平物語の生成

福井 貞助 三六

模倣期 (三六) 國民的自覺期 (三六) 庶民性喪失期 (三六) 庶民擡頭期 (三六) 「竹取物語」の成立時期 (三六) 物語以前の説話 (三七) 下衆と庶民の對照 (三六) 權威ある庶民「翁」 (三六)

開麗翁 (三七) 業平物語のおこり (三七) 生成ということ (三七) 業平像をささえるもの (三七) 勢語を業平物語と見ること (三七) 事實とそら物語 (三七) ふえゆく戀物語 (三七) 戀の英雄 (三七) 歩きまわる業平 (三七) 業平涅槃 (三七)

海道下りの文藝

鈴木 正彦 三六

雪祭りの瀾宜舞 (三七) 語り物としての「海道下り」 (三七) 宴曲と曲舞の詞章 (三七) 能の道行 (三七) 道行の歴史 (三七) 語り物の道行 (三七) 道行文學の系譜 (三七) 貴種流離譚 (三七) 麻績王の配流傳説 (三七) 貴種流離の原因 (三七) 漂泊者の文學 (三七) 中將の名稱と巡遊漂泊の徒 (三七)

在原氏の周邊

湯本 祐之 三六

はじめに (三七)

一 古代氏族の沒落 奈良層の亂と仲麿の亂 (三七) 樂子の亂 (三七) 承和の變 (三七)